

はじめに——現場で働く記者たちの姿にふれる

本書は、皆さんとともに、ジャーナリズムのあり方について考えるために作った一冊です。専門知識を暗記するような入門書ではありません。報道の仕事は一つとして同じ現場がないので、暗記した知識だけでは対応できないからです。どうしたら良いのか。どうしたら良かったのか。私たちは常に考え続ける必要があります。意見交換を重ねながら深く考えることが、より良いジャーナリズムを生み出す原動力となります。そこで、報道記者たちの仕事ぶりを知ることができ、対話の糸口ともなるような12本の著名な映画を取り上げてみました。

本書には、一緒に検討したい三つの問いがあります。

- 報道記者は、どのような仕事をしているのだろうか。
- ジャーナリズムは、何のために、誰のために、あるのだろうか。
- 民主社会にとって、ジャーナリズムはどのような役割を果たしているのだろうか。

これらは、ジャーナリズムの原則（エレメンツ）と言われる、この専門職の核にある問いです。

プラットフォームのIT化で、ニュースはスマホで簡単に読めるようになりました。生成AIが過去のデータから記事をつくる社会も、そこまで来ています。しかし、読まれるニュースを売るだけでは、ジャーナリズムはその役割を果たすことができません。検索しても出てこないことこそ、ニュースなのです。暮らしやすい社会を作っていくために、記者は何をし、私たちはその情報を得てどうするのか。一人ひとりが好き嫌いだけでなく、理由も含めて熟考するために、原点を見つめ直す。その手がかりを、本書で提供したいと思います。

観て、考えて、みんなで話そう！

では。さっそく、映画作品を楽しむところから始めてみましょう。

多くの作品は、皆さんにも身近な配信サービスで、手軽に観られます。テーマごとに独立しているので、どのテーマの映画から見始めてもかまいません。本書

は、ジャーナリズムを大切に思う映画監督の力を借りて、ジャーナリストたちの仕事を「見える化」しようとする試みでもあります。説明より作品。ぜひ、映画をご覧ください。

その後で。映画から得たイメージを鵜呑みにせず、じっくりと考えてみましょう。映像はイメージを作る力が強く、わかったような気持ちになりやすいものです。しかし、現実とのギャップがあります。映画ごとの検討なら、テーマの1ページ目にある「考えてみよう」がヒントになります。それらの問いを深める解説が本文にあります。もし、さらに疑問が生じたら、調べてみましょう。調べるための信頼性の高い情報源などについては、本書の付録にまとめました。活用してください。

人によって、映画で注目したところには違いがあるものです。その違いを知ることが、視野を広げる大切なきっかけになります。映画を観た人どうしの対話を楽しみながら、ジャーナリズムの役割について考えてみてもらえれば幸いです。

2023年5月

編著者一同



本書のねらいと使い方

本書では映画を介して皆さんを、古今東西の報道の舞台裏にお連れします。刻々と変化する現場。次々と生じる難題。果敢に試行を重ねる記者たち。ニュースになる前の報道の内側に焦点をあてます。

記者にフォーカスした映画のラインナップ

本書で取り上げる映画作品の選定は難しい作業でした。まず、記者が登場する作品を、世界と日本で製作された映画から幅広く探しました。候補にあがった作品は130本近くにもなりました。

それらはおおよそ三つに分類できました。①事実に基づきその再現を重視した社会派映画、②登場人物に記者を配した娯楽映画、③事実の記録であるドキュメンタリー映画、です。内容面では、ジャーナリズムの良き社会的役割を描くもの、ジャーナリズムの問題に焦点をあてるものといった実話ベースやフィクションの作品群と、記者が登場するロマンスやミステリー、さらには犯罪ものや戦争ものなどでした。娯楽に力点がある作品は候補から外しました。映像論からいえば、劇映画とドキュメンタリー映画は異なるジャンルです。しかし、本書の目的を最優先にし、映画論の分類にとらわれることなく作品を選びました。また、DVDとして市販されており、入手が容易であることを必須条件としました。

日本のテレビ・ドキュメンタリー番組や記録映画には、大変すぐれた力作がたくさんあります。たとえば、「標的の村」(琉球朝日放送)、「はりぼて」(チューリップテレビ)、「さよならテレビ」(東海テレビ)などは、報道記者やディレクターの社会的に重要な役割がよく見えてくることでしょう。昨今では、「エルピス」(関西テレビ放送)のような深みのある力作が、テレビドラマにもあります。しかし、本書制作時点ではいずれもDVDが市販されていませんでした。そこで、日本の記者職の皆さんが共感するものを、邦画以外からも積極的にピックアップしました。

候補に残った映画は24本になりました。それらの作品を、ジャーナリズムの

機能別に、五つに分類しました。本書のⅠ～Ⅴ部がこれにあたります。類似する機能の作品は良作や力作でも厳選し、12本に絞りました。

執筆者と構成

執筆者については、ジャーナリズムのありようを多角的な立ち位置から観ることを重視し、作品に登場する記者の実務に精通した報道人や、作品のモチーフに詳しい研究者を探しました。執筆者は男性と女性がほぼ半数ずつ。保守的な報道業界や研究職としては、めずらしいかもしれません。

執筆者どうしは、編集方針や互いの内容の骨子を共有しています。しかし、本文やコラムの記述内容については、互いの経験や専門を最大限尊重して活かす方針をとりました。執筆者については執筆者紹介欄をみてください。

本書の全体構成は、前述のようにジャーナリズムの機能を五つに分け、それぞれの機能が観察しやすい作品ごとにテーマをたてました。さらにゲストスピーカーによる「現場からのメッセージ」を加え、巻末に付録をつけました。

本文の各テーマは、同じフォーマットの構成です。最初の見開き2頁が映画作品の基本情報です。1頁目のテーマタイトルとリード文、「キーワード」「考えてみよう」が、その映画で検討したいジャーナリズム論のポイントです。2頁目は作品介绍、3頁目以降は以下の5項目で解説されています。

「1 何が起こっていたのか」は、作品のモチーフや当時の様子などの背景説明です。本文のメインは、「2 ジャーナリズム論からの作品解説」です。次の「3 今の社会における「……」」は各テーマを現代社会に引きつけて考えるヒント、「4 広げ、深めて考える」はモチーフやテーマをちょっと別の角度から考える視点を提供します。最後に、関連する映画や書籍などを「もっと知りたい人へ」で紹介しました。

各章の章末に、13本のコラムがあります。これらは、各章の重要ポイントについて専門的に概説した読みもので、各領域の第一人者による寄稿です。実務の諸相、理論、歴史、倫理や法律といった制度論、機能論、効果論など。ジャーナリズム研究のさまざまなアプローチに触れられるように、構成してあります。コラムごとに独立しているので、どこから読んでもわかるようになっています。

本書の使い方

高校や大学では、生徒や学生による発表や報告の後、クラス内でグループ・ディスカッションがよく行われます。本書は、こういった場面でも使いやすいように、編集しました。編著者の水野剛也は、長年、少人数で映像を介した対話型の授業開発を試みており、その成功のコツは、対話の前の準備にあると言います。

「活発な意見の応酬は、裏付けをとまなう熟考があってこそです。まず、論点をしぼることです。「広く、浅く」ではなく、「狭く、深く」。そのために、守備範囲を限定するわけです。各章の冒頭にある「考えてみよう」がそれです。次に、全員が共通して読む基本文献・資料を提示することです。映像はたしかに情報量が多いけれど、建設的な議論をするためには、それだけでは不十分です。新聞・雑誌記事、学術論文、書籍、DVD 付属の冊子、BPO（放送倫理・番組向上機構）の決定など、論点に関連する資料をあらかじめ用意します。加えて、それぞれ、追加的に独自の調査をします」。

見て話すだけではなく、「考えてみよう」の問いなどについて、自分でもさらに調べてみる。その材料も対話する相手と事前に共有し、発表と討議を深めて楽しむ、という流れです。ここまでくると、大学のゼミ合宿のレベルになります。

本書の「付録」（198-205 頁）では、言論の自由と公共の利益についての概説と、独学のサブツールとなる情報源を紹介しました。博物館、ホームページや書籍、専門雑誌、教育パッケージ、ジャーナリズムの賞などです。

社会と技術の変化の中で、ジャーナリズムの姿も変化します。その機能が弱まってきたら、具体的に検証して改善を重ねる必要があります。機能が弱まっているかどうか、改善はどの方向でするといいのか。こういったことを考えるためには、原則の理解がとても重要になります。デジタル・シティズンシップの時代を担う皆さんが、自由闊達に新たなジャーナリズムのありようをめぐる対話する。そのための土壌を耕すには、どのような本が必要だろうか。編著者も著者もともに試行し、さまざまな資料にあたり、関係者と対話を重ねました。多くの人たちからのアイデアと協力によって生まれた、ジャーナリズムを元気にするための試みの一冊です。

（別府三奈子）

目 次

はじめに——現場で働く記者たちの姿にふれる i

本書のねらいと使い方 iii

編著者・執筆者紹介 viii

I 小さな声を拾い上げる

Theme 1 社会問題の可視化【スポットライト 世紀のスcoop】……………2

Theme 2 弱い声を束ねる【シー・セッド その名を暴け】……………16

II 隠された事を伝える

Theme 3 知る権利に奉仕する【ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書】………32

Theme 4 社会に警鐘を鳴らす【チャイナ・シンドローム】……………46

Theme 5 権力の暴走を告発する【シチズンフォー スノーデンの暴露】……………62

III 災害と事件事故

Theme 6 地域情報の生命線【神戸新聞の7日間 阪神・淡路大震災から15年
～命と向き合った被災記者たちの闘い～】……………78

Theme 7 命と向き合う【クライマーズ・ハイ】……………94

IV 見方を変える

Theme 8 多角的な視点の提供【FAKE】……………110

Theme 9 判断材料を共有する【アイヒマン・ショー 歴史を映した男たち】…122

Theme 10 声なき声の記録【ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎 90歳】……………138

V 歪まない社会のために

Theme 11 情報操作を止める【タクシー運転手 約束は海を越えて】……………154

Theme 12 未来への教訓【日本人はなぜ戦争へと向かったのか】……………168

VI 現場からのメッセージ

ジャーナリストの仕事の意味 大門小百合 186

column

1 取材のリアル 飯田裕美子 14

2 基本的人権とジャーナリズム 別府三奈子 30

3 調査報道の実際
—「ペンタゴン文書」と「パナマ文書」を比べてみよう 澤 康臣 44

4 ジャーナリズムの記録とアーカイブ 松下峻也 60

5 内部告発 松原妙華 75

6 もう一つのジャーナリズムとメディア—地域紙と読者の重層性 佐幸信介 93

7 記者の良心と責任 飯田裕美子 107

8 BPO 放送界のご意見番は資料の宝庫 水野剛也 121

9 ト라우マと取材 河原理子 136

10 ジャーナリズムの倫理 畑仲哲雄 151

11 プロパガンダとジャーナリズム 津田正太郎 166

12 歴史が語る、100年地続きの今 土屋礼子 182

13 紛争・戦取材の現場から 綿井健陽 195

付録 ジャーナリズムのしくみをもっと知ろう

[1] ジャーナリズムの下部構造を観察する 198

[2] 自習の道具箱 202

おわりに—専門知と実践知の対話から 206

索引 210

編著者・執筆者紹介

編著者

別府三奈子（べっぷ・みなこ） テーマ1、3、10、コラム2、付録1

法政大学社会学部教授。専門は米国ジャーナリズム思想史・写真ジャーナリズム論。著書『ジャーナリズムの起源』（単著、世界思想社、2006）、『アジアでどんな戦争があったのか 戦跡をたどる旅』（単著、めこん、2006）、『調査報道ジャーナリズムの挑戦 市民社会と国際支援戦略』（共著、旬報社、2016）ほか。

飯田裕美子（いいた・ゆみこ） テーマ2、7、コラム1、7

共同通信社常務監事。社会部記者・デスク、編集委員・論説委員などを経て現職。2018年より法政大学社会学部兼任講師。著書『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて 新聞女性学入門』（共著、現代書館、1996）ほか。

水野剛也（みずの・たけや） テーマ8、12、コラム8

明治大学政治経済学部教授。専門はアメリカ・ジャーナリズム史、日系アメリカ人史。著書『有刺鉄線内の市民的自由 日系人戦時集合所と言論・報道統制』（単著、法政大学出版局、2019）、『「自由の国」の報道統制 大戦下の日系ジャーナリズム』（単著、吉川弘文館、2014）、『「敵国語」ジャーナリズム 日米開戦とアメリカの日本語新聞』（単著、春風社、2011）ほか。

執筆者（50音順）

河原理子（かわはら・みちこ） コラム9

ジャーナリスト、東京大学大学院情報学環特任教授、武蔵野大学客員教授、元朝日新聞記者。著書『フランクル『夜と霧』への旅』（単著、朝日文庫、2017）、『戦争と検閲 石川達三を読み直す』（単著、岩波新書、2015）、『〈犯罪被害者〉が報道を変える』（共著、岩波書店、2005）、『犯罪被害者 いま人権を考える』（単著、平凡社新書、1999）ほか。

佐幸信介（さこう・しんすけ） テーマ5、コラム6

日本大学法学部教授。専門は社会学、メディア論。著書『空間と統治の社会学』（単著、青弓社、2021）、『プラットフォーム資本主義を解説する』（共著、ナカニシヤ出版、2023）、『コミュニケーション資本主義と〈コモン〉の探求』（共著、東京大学出版会、2019）、『国道16号線スタディース』（共著、青弓社、2018）ほか。

澤 康臣（さわ・やすおみ） コラム3

専修大学文学部教授、元共同通信記者。専門はジャーナリズム論。著書『事実はどこにあるのか 民主主義を運営するためのニュースの見方』（単著、幻冬舎新書、2023）、『グローバル・ジャーナリズム 国際スクープの舞台裏』（単著、岩波新書、2017）、『英国式事件報道 なぜ実名にこだわるのか』（単著、文藝春秋、2010）ほか。

大門小百合（だいもん・さゆり） 現場からのメッセージ

ジャーナリスト、東京女子大学非常勤講師、元ジャパンタイムズ執行役員、編集局長。著書『The Japan Times 報道デスク発 グローバル社会を生きる女性のための情報力』（単著、ジャパンタイムズ、2013）、『ハーバードで語られる世界戦略』（共著、光文社新書、2001）ほか。

津田正太郎（つだ・しょうたろう） コラム 11

慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所教授。専門はナショナリズム研究、プロパガンダ研究。著書『ナショナリズムとマスメディア 連帯と排除の相克』（単著、勁草書房、2016）、『メディアは社会を変えるのか メディア社会論入門』（単著、世界思想社、2016）ほか。

土屋礼子（つちや・れいこ） コラム 12

早稲田大学政治経済学術院教授。専門はメディア史・歴史社会学。著書『大衆紙の源流』（単著、世界思想社、2002）、『近代日本メディア人物誌 創始者・経営者編』（編著、ミネルヴァ書房、2009）、『対日宣伝ビラが語る太平洋戦争』（単著、吉川弘文館、2011）、『日本メディア史年表』（編、吉川弘文館、2018）ほか。

西 栄一（にし・えいいち） テーマ 6

神戸新聞社地域総研顧問。社会部、整理部、デジタル事業局デジタル情報部長などを経て現職。2019～2022年、関西圏のさまざまな大学との地域連携講座を兼任。阪神・淡路大震災時は、京都新聞社内での紙面づくりなども担当。

畑伸哲雄（はたなか・てつお） コラム 10

龍谷大学社会学部教授。専門はジャーナリズム研究。著書『沖縄で新聞記者になる 本土出身記者たちが語る沖縄とジャーナリズム』（単著、ポーター新書、2020）、『ジャーナリズムの道徳的ジレンマ』（単著、勁草書房、2018）、『地域ジャーナリズム コミュニティとメディアを結びなおす』（単著、勁草書房、2014）ほか。

ファン・ギユンミン（HWANG Kyun Min） テーマ 11

明治学院大学言語文化研究所特別研究員、韓国野花映画祭プログラマー。著書 *ReFocus: The Films of Yim Soon-rye*（共著、Edinburgh University Press、2023）、『『ドライブ・マイ・カー』論』（共著、慶應義塾大学出版会、2023）、『韓国女性映画 わたしたちの物語』（共著、河出書房新社、2022）ほか。

松下峻也（まつした・しゅんや） テーマ 4、コラム 4、付録 2

法政大学兼任講師。専門は社会学、メディア研究。著作『原発震災のテレビアーカイブ』（共著、法政大学出版局、2018）、「アーカイブ化されたテレビ番組が描くピクニ事件」（『マス・コミュニケーション研究』92号、2018）ほか。

松原妙華（まつばら・たえか） テーマ9、コラム5

東京大学大学院情報学環特任助教。専門は情報法、メディア法。著作「公的空間における匿名の可能性 アーレントの『現われ』の議論から検討する報道における氏名・肖像」（『日本アーレント研究会誌 Arendt Platz』7号 51-66 頁、2022）ほか。

綿井健陽（わたい・たけはる） コラム13

ジャーナリスト、映画監督。1971年大阪府生まれ。1998年からアジアプレスに参加。イラク戦争報道で「ボーン・上田国際記者賞」特別賞、「ギャラクシー賞」報道活動部門・優秀賞など受賞。ドキュメンタリー映画『Little Birds イラク 戦火の家族たち』（2005年）、『イラク チグリスに浮かぶ平和』（2014年）を撮影・監督。

凡例

- 1 本文中は、原則として敬称を省略しています。
- 2 本文中で映画のセリフを引用しています。日本語以外で製作された作品の場合、原則として字幕テロップを引用しています。しかし、早口のところなどは、テロップではかなり省略されています。その場合は場面の意味を補うために、原語を適時翻訳し、あるいは、日本語吹き替え版を聞くなどして、意識している場合もあります。
- 3 媒体名は、原則として各テーマの初出時に正式名称で表記し、その後は必要に応じて略称で表記しています。例：ニューヨーク・タイムズ→NYタイムズ
- 4 映画の作品から画像やセリフを引用する場合、位置を示すカウンター数字は、原則として秒の表記を省略しています。画面には秒まで表記されているのでご注意ください。例：作品中20分25秒は0:20と表記、1時間20分25秒は1:20と表記。

写真資料提供 神戸新聞社／日本新聞博物館／イスラエル国立公文書館／韓国光州市5・18記念財団

本文イラスト提供 あらいしづか（イラストレーター）

カバー作品提供 佐々木駿（和紙造形／絵描き）

Theme 1

社会問題の可視化

私たちの暮らす社会は、さまざまな課題や問題を抱えながら、変化しつづけている。ウクライナ戦地のような国家的惨事、近所の信号機のない十字路での交通事故、電気料金の値上がり、面識のない他者からの暴行、職場・学校・家庭内などの人間関係による生きづらさ。その社会に属しているがゆえに被る苦しみの原因を、個人が一人で特定し、解決することは難しい。社会的な問題は、その発生や存在を知らなければ、解決の動きは始まらない。問題解決のための最初の扉をあける鍵を、ジャーナリズムを担う人びとだけがもっていることもある。
(別府三奈子)

キーワード *keywords*

独立性、責任、公共の利益、告発、語らせない空気

考えてみよう *discussion*

① 記者たちは、なぜ、この取材を始めたのか？

神父による児童性虐待は、警察や弁護士、当事者やその家族など、知っている人が多かった。新聞でも数回は記事にしていた。しかし、今回のような報道はしてこなかったのは、なぜだろうか。

② 記者たちは、どのようにして、事実を確認していったのか？

取材対象者へ、記者たちは直接取材を次々と進めていく。そのやり方を、あなたはどの思っただろうか。

③ 記者たちは、どのような基準で記事にする・しないを判断したのだろうか？

「記事にしたとき」「記事にしなかったとき」、いずれもメリット・デメリットがある。今回の事例で、あなたなら、どうするだろうか。その理由は何だろうか。

④ なぜ、被害者たちはこれまで、語れなかったのだろうか？

被害者本人に原因のない性被害について、本人たちが語れず、語った人たちの声も届きにくかったのはなぜだろうか。

⑤ なぜ、今回は読者からの反応が違ったのだろうか？

以前、神父の不祥事を記事にしたときは、読者からの抗議が殺到した。今回は、同じような性被害にあった人びとからの電話が次々とかかってきた。この違いが生まれた理由はなんだろうか。



スプロットライト 世紀のスクープ

原題：SPOTLIGHT（米国映画、2015年製作、128分）

監督・脚本：トム・マッカーシー（移民問題を扱った「扉をたたく人」の監督。

脚本家、俳優としても活躍）

共同脚本：ジョシュ・シンガー（ハーバード大学の法学博士号、経営修士号などを
もつ脚本家）

●**作品の特徴** アカデミー賞（2016年）作品賞、脚本賞を受賞。映画は、実際の出来事にできる限り忠実に制作する手法がとられており、アカデミー賞の授賞式に記者たちも参加している。モチーフとなったボストン・グローブ社の調査報道は、ピューリッツァー賞公益部門を受賞。

●**あらすじ** 米国北東部マサチューセッツ州、2002年1月6日。地元の大手新聞ボストン・グローブ紙の1面トップに、調査報道チーム〈スプロットライト〉の特集記事が掲載された。タイトルは、「教会は何年も神父による虐待を容認」。この調査報道は、カトリック教会の神父たちによる児童性虐待が、過去数十年間にわたって繰り返されており、それを教会が組織的に隠蔽してきたこと、さらに、教会の示談交渉は被害者側に守秘義務を課しており、司法制度が結果として、被害を受けた側に沈黙を強いてきたことも明らかにしていった。映画は、最初の特集記事が紙面に掲載されるまでの半年間にわたる、スプロットライトチームの記者たちの取材過程を、実話に基づき描いた作品である。

●**主な登場人物**（カッコ内は俳優名）

マーティン・バロン（リーヴ・シュレイパー） ボストン・グローブ編集局長

ベン・ブラッドリー・Jr.（ジョン・スラッテリー） ボストン・グローブ編集部長

ウォルター“ロビー”ロビンソン（マイケル・キートン） スポットライト編集長

マイク・レゼンデス（マーク・ラファロ） スポットライト担当記者

サーシャ・ファイファー（レイチェル・マクアダムス） スポットライト担当記者

マット・キャロル（ブライアン・ダーシー・ジェームズ） スポットライト担当記者

ミッチェル・ガラベディアン（スタンリー・トゥッチ） 被害者側の訴訟を支える弁護士

フィル・サヴィアノ（ニール・ハフ） 被害者の会の推進役

バーナード・ロウ（レン・キャリオ） ボストン大司教区で最高位の枢機卿

ジム・サリヴァン（ジェイミー・シェリダン） 教会側の弁護士、記事の公表を可能にした内部協力者

【ミニ用語解説】 聖職者の位階 カトリック教会の聖職者は、位が高い順に、ローマ教皇、枢機卿、大司教、司教、司祭（神父）、助任司祭、などがある。現在の教皇フランシスコは第266代。教皇を補佐する枢機卿は世界に200人以上おり、日本にも一人いる。教区は一人の司教が管轄する地域のことで、大司教は複数の教区の集まりである大司教区を管轄する。

レクチャー *analysis & research*

1 何が起こっていたのか

2001年夏、米国北東部マサチューセッツ州ボストンで、カトリック教会の聖職者による児童性虐待に対し、訴訟が起こされた。これについて、地元の大新聞ボストン・グローブ紙スポットライトチームが下調べをひそかに始めた。スポットライトチームとは、編集局内で調査報道を専門に担当する取材班の呼称である。紙面上に〈スポットライト〉という独自ロゴの掲載欄があり、地元でよく知られた存在だった。

半年にわたる極秘調査を経た2002年1月6日、同紙は連載の最初の記事を掲載する。写真は、訴訟を起こされているゲーガン元神父の近景。続報が別ページに掲載されている長文の特集だった。同紙はその後1年間にわたり、600本近い記事を掲載。記事の掲載をきっかけに、被害者たちが次々と名乗り出て、新たな訴訟が各地で起こされていった。

神父たちによる児童性虐待は、急に起こった問題ではなかった。心理療法士リチャード・サイプは、1965年から5年間、性虐待行為をしたカトリック神父が入っていた精神療養所に勤務した。その後30年間にわたって神父と被害者を研究し、統計学的にいえば、カトリック教会神父の約6%が性虐待しているとの研究結果を公表。その他、1985年当時、教会が支払った被害者たちに対する賠償金は10億ドル、禁欲している神父は全体の50%、神父による児童性虐待は精神的現象である、などと言及。教会から激しい攻撃を受けたということだった。



映画1:57の場面。2002年1月6日日曜版、一面トップ記事。「教会 虐待を黙認」の見出しの後の本文左側に、黒い四角に白い丸抜きのデザインで、「spotlight」のロゴが入っている。

米国の新聞は記事一本の文字量が多い。出来事の詳細が市民社会に共有されていくにつれて、地域社会の教会に対する不信の念が噴出し、教会の自浄能力に批判が集まった。教会への寄付も激減した。その後、249人の神父や教会関係者による性的虐待が告発され、その被害者は1000人を超えた。事実に基づくスポットライトの調査報道は、この問題を個々の神父に矮小

神父による性虐待事件の略年表

1965年～	心理療法士リチャード・サイプが虐待した神父のための精神療養所に勤務
2001年6月	ジョン・ゲーガン元神父の児童性虐待に関するボストン・グローブのコラム掲載
7月	ボストン・グローブ社スポットライトチームが調査開始
2002年1月6日・7日	初の紙面化・連載記事開始
1月24日	記録ファイルの抜粋と経緯を掲載
1月31日	70人の神父による性的虐待と和解交渉の記事を掲載 その後の1年間におよそ600本の関連記事と書籍を刊行
10月	ロウ枢機卿はバチカンへ転属
2003年	ゲーガン元神父は、獄中で暴行を受け死亡

化させることなく、教会のしくみの改善を促す一助となった。

この問題の根深さは、その土地柄にも起因する。米国東北部は教会との縁が深い。話は米国建国時にさかのぼる。1620年、英国からメイフラワー号で米国大陸に流れ着いた清教徒たちは、最初の植民地をプリマスに築いた。ボストンは、そこに隣接する植民地で、1630年に建設されている。アメリカ独立戦争の発端となったボストン虐殺事件、ボストン茶会事件などの舞台でもある。米国の独立記念日は、7月4日である。これは1776年7月4日の独立宣言に由来している。まさに米国発祥の伝統ある地域で、アイルランドからの移民が多く、敬虔なキリスト教信者の層が厚い。

2001年9月11日に同時多発テロを受けた米国で、人びとのために祈る枢機卿の姿がテレビで放映された。当時、ボストンの都市部住民はおよそ3万8000人。そのうちの2万人が、カトリック教会の信者だった。

記者のサーシャが同居する祖母は敬虔な信徒で、週に3日間も教会活動をしている。地元の人びとから信頼の厚い教会について、その不正を暴く記者たちの複雑な想いも、記者たちの仕事ぶりとともに、映画でていねいに描かれている。

2 ジャーナリズム論からの作品解説

米国でジャーナリストたちが担っている仕事は、大きく二つに分かれている。出来事の正確で素早い記録の共有（news / ニュース）と、問題の解決のための意見交流の促進（views / 論評・意見）である。

おわりに——専門知と実践知の対話から

2000年代生まれの大学生にとって、自分の意思で、あるいは友達どうしで最初に見た映画といえば、『シン・ゴジラ』（2016年、庵野秀明脚本・総監督、東宝）がその一つに挙がるのではないのでしょうか？

映画の冒頭、東京湾で海底火山が噴火したような水蒸気が噴き上がり、アクアラインのトンネルが壊れます。これを最初に伝えているのが「たかが浸水でこの騒ぎw」「地震??」というSNSのつぶやきです。首相官邸での閣僚会議を中断させたのは「海面から超巨大な尻尾を確認」というテレビの生中継でした。

建物やインフラを破壊し、放射能をまき散らして首都東京に向かうゴジラ。長谷川博己演じる内閣官房副長官・矢口蘭堂が、省庁の垣根を超えて結集した政官界のメンバーと、ゴジラの息の根を止める作戦を考えます。実にスリリングでカッコいい。しかしこの映画、どこまでいっても、速報以外のジャーナリズムはまったく出てこないのです。新聞紙面はただの一度も出ません。政権側が対処すべきやっかいごととして「記者会見」が描かれるものの、国民への周知は防災無線や短いニュース音声だけ。東京中心の防衛をいぶかる若い記者と、訳知り顔でさすとすベテラン記者が一瞬映りますが、登場人物として役名のある記者は、政権に頼まれて調べ物をするフリージャーナリスト早船達也ただ一人です。

これがいまの学生が見ている現実なのだろうと思います。デバイスだけの問題ではありません。『シン・ゴジラ』では、危機への対処を決めるのは国家であり、有能で志のある政治家と官僚がいたから日本は運良く救ってもらえました。防災無線より存在感の薄い報道が、かろうじて政府広報の役割を果たします。政府の判断を検証することも、巻き込まれた犠牲者の横顔を伝えることもありません。

私は通信社で記者・デスクなどを務めた後、2013年から採用担当として、2018年から大学の兼任講師として多くの学生と接する機会を得ました。中学高校のころから、報道の仕事ネガティブに見ている人が増えたように感じています。そうなった理由は、報道の側にも問題があったでしょう。ですが報道を嫌う人も、実際の記者の行動や思いを知る機会はありません。

実際に大学の授業で現役の記者に話をしてもらうと、学生はよくこの仕事を理解してくれます。社会の中での役割や、それを果たす難しさ、何かを伝えることで誰かが動くときのやりがい。遺族取材というだけで顔をそむけていた人も、京都アニメーション放火殺人事件を長期にわたり取材した話を聞き、「自分の考えていた『遺族』像は固定的だと思った」「亡くなった人の作品を紹介して、その人を記録する姿勢は素晴らしいと思った」などの感想を寄せてくれました。

記者を題材にした映画を見てほしい、と思ったのは、こうした学生たちの柔軟な心や吸収力を信じたからです。ジャーナリズム史が専門の法政大学の別府三奈子さん、映画を題材に学生どうしが討論する授業を重ねてきた明治大学の水野剛也さんと、ジャーナリズム映画の本を作りたいというアイデアで一致しました。

とはいえ、研究者と報道従事者では、関心も面白がり方も違います。日航ジャンボ機墜落事故を描いた『クライマーズ・ハイ』は、報道従事者にとってはNHKドラマ版が圧倒的によく、映画版は違和感が大きい。研究者の二人からは「なぜですか」と問われました。別府さんの家に1985年の事故当時を知る上毛新聞社元取締役の武藤洋一さんを招き、ドラマと映画を見比べながら「この遺族の言葉がよい」「デスクはこんなことは言わない」と4人で議論を重ねました。

実践知の側は、毎日の出来事に追われがちです。専門知の立場から「報道は人びとの『知る権利』に資する」「報道がなければ民主主義は成り立たない」と明示していただき、あらためて一丁目一番地に戻ることができました。

『シン・ゴジラ』は、2011年の東京電力福島第一原発事故を想起させる映画です。事故当時、内閣や電力会社の発表だけだったのでしょうか。実際には多くの記者たちが、政府の判断を検証し、企業に質問を重ね、識者の見解を集め、人びとの暮らしがいかに破壊されたか、そこで働く人びともどんなに苦しんだかを、調べて報じました。映画で、矢口副長官が生き残ったのは幸いでしたが、もし多国国籍軍の核攻撃を受け入れる政治家だけが残っていたら、日本はどうなったでしょう。そんな「主権ガチャ」を黙って受け入れはしない、自分たちの社会は、正しい情報を得て自分たちで判断して決めていきたいという人びとに資するために、報道の側として働きたいと私は思います。

最後に、多様な執筆陣をそろえ、引っ張ってくださった、映画で言うなら“別府組”監督の別府三奈子さんにあらためて敬意を表します。 (飯田裕美子)

前世紀末、アメリカ留学時に授業で見た映画です。現在でも購入・レンタル可能です。

『市民ケーン』Citizen Kane（米国、1941年製作、119分）

『大統領の陰謀』All the President's Men（米国、1976年製作、132分）

『スクープ 悪意の不在』Absence of Malice（米国、1981年製作、116分）

『ニュースキャスター』Broadcast News（米国、1987年製作、132分）

タイトルはもちろん、シーンのいくつかさえ、いまでも鮮明に覚えています。教員や学友と語りあったことも。それほどまでに、映像は記憶に残り、血肉ともなる。教材として有効であることは、間違いありません。ただし、何事も使えよう。

なのに、質の高い作品を選びすぎり、適切な解説を加え、具体的な活用法まで指南してくれる便利なテキストが、これまでなかった。そこで、別府さんの号令を受け、私たちが決起したわけです。

その手はじめとして編まれた本書では、ジャーナリズムの意義や役割を前向きに捉えることを基本方針としています。本書で学んだら、次は中・上級者として、ジャーナリズムの「負」の側面にも光をあてた作品に挑戦してはいかがでしょうか。よく言いますね。欠点を含めて受け入れるのが本当の愛だと。

とりあえず、冒頭であげた作品からどうぞ。 （水野剛也）

ジャーナリズム研究（新聞学）という学際領域に出会って40年になります。今回、たくさんの映画を見直し、1世紀半にわたる多くの文献を読み返しました。豊富な実務経験からの叡智、社会学理論、倫理・哲学的な思索、法学的な論理的思考、数量調査からの見立てなど。アプローチは違いますが、先人たちの目標は、自由に語り合える社会を作ろう、困っている人を放り出さずに問題を自分たちの手で解決しようという点で一致するようです。川の支流があわさり、ジャーナリズムの改善という大きな川が流れているように見えます。

日本ではこの数年、報道に関する産学共同の研究の場が減り、教育の主眼が情報社会から情報技術にシフトしたことで、この川の流れが細くなっているようです。報道の現場では変わらずに、無名の報道職たちの努力が続けられているのに、その姿が以前にも増して見えづらくなっています。こういった状況を懸念する人

たちが集まって、本書ができました。

共編者の水野剛也さんは、恩師武市英雄先生のもとでの同窓です。同じく共編者の飯田裕美子さんとは、十数年前にシンポジウムの壇上で同席したご縁から、大学での授業をめぐり何年も協力と助言を仰いできました。報道職への思いが深く揺るがないお二人との対話が、本書刊行の推進力となりました。共著者との出会いはさまざま、旧知の職場の同僚や同業者のほか、日本メディア学会ジャーナリズム研究・教育部の仕事を通じて知り合った優秀な研究者やベテラン報道人もいます。

映像を扱う教育法の開拓では、小林直毅さん主催の水俣事件報道研究会、大石泰彦さんたちのヒューマン・ライツ教育研究会、公益財団法人放送番組センターと早稲田大学ジャーナリズム教育研究所の共同研究など、多くの場と人の交流に負うところが大きいです。多数の著者がいる本書の編集作業と刊行では、大ベテランの鈴木クニエさんに大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。

これから、本書で学んでくださる皆さんにもぜひ加わっていただき、世界を潤す川の流れを絶やさぬよう、手入れを続けていければ幸いです。（別府三奈子）

